

春風

2025. 3. 26

一輪の美しい花には誰もが足を止めるでしょう。

しかし、それを咲かせた春風には誰も気づきません。

この言葉に出合い、あることを思い出した。それが、「子どもは木、地域は土、教員は風」である。中学校に勤務していたときに、地域の広報誌に載せる文章の中で使ったことがある。地域の集まりでも、話の中で一度使ったことがある。

高校から中学校へと異動したが、そのほとんどは、コロナ禍だった。人との交流が途絶えた。学校を支えるべき地域との結び付きが危うくなった。会議や会合など、人が集まることは、どんどんなくなっていった。

地域は、地域の子どもの育てる大事な土である。その土によって生まれた子どもは、りっぱな木となる。木には、きれいな花が咲く。花を咲かせるには、子ども本人の努力も必要だが、家族、地域、そして、教員の力が欠かせない。家族や地域は、ずっと子どもの傍らにいる。だが、教員は、いずれ風のように去っていく。

教員は、春風のような存在でありたい。たとえ、子どもに感謝されなくてもいい。子どもが、自分の力で成長できたと思っていれば、それでよい。一カ所にとどまらない教員は、まさしく風のようなものである。子どもにすれば、長い人生の中では、その教員との出会いは、ほんの一瞬のことであろう。だが、この短い時間が、子どもの人生に、進路に、生き方に少なからぬ影響を及ぼすことがある。花を咲かせるには、風が必要である。教員は、常に、そんな風になりたいものである。

今年度も、人事異動の時期を迎えた。それぞれの学校を去る教員がいることだろう。それこそ春風のように、子どもの前を過ぎ去っていく。そして、次の活躍の舞台へと進んでいく。

思えば、教員というものは、子どもに対して、さほどのことはできていないのかもしれない。子どもを育てるベースは、家族であり地域である。その礎があつての教育である。そう考えると、ご家族や地域に感謝しながら、子どもの教育にあたらなければならない。謙虚な心で、誠実に職務を全うする。それが基本である。

春は、別れの季節ではあるが、出会いのときでもある。教員は、こんな素敵な時期に、風になれるのだから幸せである。そのことをかみしめながら、春風になりたい。